

日本語ディベートにおけるスピーチレベルの形態と機能

馮, 荷菁
九州大学大学院地球社会統合科学府地球社会統合科学専攻

<https://doi.org/10.15017/1854987>

出版情報：地球社会統合科学研究. 7, pp.97-109, 2017-09-25. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：

日本語ディベートにおけるスピーチレベルの形態と機能

フウ 馮 カ セイ
 荷 菁

1. はじめに

日本語における文体は、主に「デス・マス体」¹と「ダ体」に2分類できる。現代日本語においては、フォーマル・インフォーマルな場面における文体使用の規則が定められている。一般的にフォーマルな場面には「デス・マス体」を使用するのに対し、インフォーマルな場面には「ダ体」を使用すると認識されている。だが、日常会話においては、「ダ体」と「デス・マス体」の混用は多く見られる。日本語母語話者は、スピーチレベル・シフト²を巧みに使いながら、コミュニケーションを効果的に進め、人間関係を円滑に保とうとしている。

本研究では、先行研究ではあまり触れられていない日本語ディベートの場を利用し、その場におけるスピーチレベル・シフトの形態と機能を分析・解明し、日本語母語話者の公的場面におけるスピーチレベルの運用技巧を探求する。

2. 用語の定義

2.1 スピーチレベル

谷口(2004)はスピーチレベルを、「ある談話において選択される文末(発話末)の文体(「ですます体」・「非ですます体」)や敬語(いわゆる尊敬語・謙譲語)、終助詞(「ね」、「よ」、「わ」など)の使用・不使用による丁寧さのレベル」(p. 49)と定義している。

スピーチレベルの分類については、主に丁寧体と普通体の2つのみとしている研究(大塚2004、杉山2000)、敬語表現(尊敬、謙譲、丁寧語、丁寧体(です・ます体)等)の出現を表す「+レベル」とそれが見られないことを示す「0レベル」という2種類に分類している研究(Ikuta 1983)、及び尊敬語、謙譲語、美化語を含む発話を全て「デス・マス体」と同レベルにしている研究(宇佐美1995、石崎2000)がある。また、丁寧体と普通体の2分類に加えて終助詞の有無を考慮した分類をしている研究(三牧2002)、さらに丁寧体でもない普通体でもないものを分析している研究(宇佐美2001)がある。

スピーチレベルが「丁寧体(デス・マス体)」と「普通体(ダ体)」という文末形式の種類を扱うという点では、上のどの研究においても一致している。だが、例外的に谷口(2004)は、スピーチレベルを「ですます体」と「非ですます体」の2分類としている。

そこで、本研究では、日本語ディベートにみられるスピーチレベルを概観するうえで、「デス・マス体」と「非デス・マス体」の2レベルを用いる。

2.2 スピーチレベル・シフト

宇佐美(1995)は同一話者の同一会話内におけるスピーチレベルシフトを「敬語使用から不使用へのシフト」とその逆の移行である「敬語不使用から使用へのシフト」に分けている(p. 30)。また、谷口(2004)は「本研究において、『スピーチレベル・シフト』とは、『ですます体』を基調とする談話の中で、任意の発話が『非ですます体』に変化することを指すものとする」(p. 118)と述べている。

本研究では、「デス・マス体」から「非デス・マス体」に変わる、あるいは「非デス・マス体」から「デス・マス体」に変わる、ということを「スピーチレベル・シフト」と定義する。

3. 先行研究

先行研究を概観する限り、公的場面における談話を扱うスピーチレベル・シフト研究は多くない。この節では、公的場面におけるスピーチレベル・シフトの実態を、それぞれテレビ討論番組(大塚2004)、学生討論(杉山2000)、講演(谷口2004)を通して概観する。

3.1 テレビ討論番組

大塚(2004)は、「サンデープロジェクト」と「日曜討論」という2つのテレビ討論番組を分析資料にして、司会者と出席者の文体切り替えの効果を「ディスコース・ポライイトネス」の観点から考察を行った。

その結果、司会者の場合において、司会者の丁寧体へ

の切り替えには、無標ポライトネス³の場合と有標ポライトネス⁴の場合とに分けられる。無標ポライトネスは、①話題導入・転換の場合、②発言内容を確認する場合、③一般的事柄を説明する場合であると示しており、いずれの場合も番組の出席者に対してだけでなく、広く一般視聴者に向けてのメッセージ発信の場合と提示される(大塚, 2004: 117)。そして、有標ポライトネスは、出席者に対する個人的な質問の時に生じていると結論付けている(大塚, 2004: 117)。

一方、出席者の場合は、丁寧体から普通体への切り替えと、普通体から丁寧体への切り替えの場合がある。まず、丁寧体から普通体への切り替えについて、無標ポライトネスの場合、丁寧体の使用率が高い石原氏、池田氏、枝野氏⁵の発言の中で、主張と要求を明確にしたい場合に文体の切り替えが起こっているのに対し、有標ポライトネスの場合、自民党に対する批判が、皮肉をこめた形で述べられていることが示された(大塚, 2004: 119)。また、普通体から丁寧体への切り替えについて、普通体基調タイプの津島氏は、党を代表した発言の場合は普通体、一般的事項についての発言は丁寧体であるということがわかった(大塚, 2004: 120)。

全体的にみると、テレビ討論番組は人間関係を構築するような場ではないため、ほとんどが無標ポライトネスであると結論付けている(大塚, 2004: 122)。

3. 2 学生討論

杉山(2000)は同じ学部の学生同士を研究対象とした討論におけるシフト生起の条件について観察した。

その結果、シフトの現れ方について、基本的な流れ部分(始まり、移行、終了)では丁寧体へのシフトが見られ、それ以外では基本の普通体に戻る傾向があると指摘している(杉山, 2000: 100)。

また、シフト生起の要因として、①場面の变化、②立場/役割の変化、③談話管理、④心理的な変化、⑤発話を聞かせる相手の変化、⑥談話構造の変化、といった6点が挙げられる。

杉山(2000)と大塚(2004)はともに討論という範疇に属するが、前者は同じ学部の学生同士を研究対象としたため、基本レベルは普通体である。それに対し、後者は公的な場面で司会者が存在するフレームがあり、基本レベルは丁寧体である、という相違点がみられる。このことから、同じ討論場面においても基調的文体が異なり、さらに文体切り換えの形式、要因にも影響を及ぼすことがあると言えよう。

3. 3 日本語講演

谷口(2004)は日本語の講演における談話展開標識としてのスピーチ・レベル・シフトの形態と機能を分析した結果、A. 引用を示すスピーチ・レベル・シフト、B. 繰り返しによる強調のスピーチ・レベル・シフト、C. 結論を示すスピーチ・レベル・シフト、D. 話し手の見解や感想などを示すスピーチ・レベル・シフト、E. 列挙(具体例など)を示すスピーチ・レベル・シフト、F. 情景描写(想像・回想など)のスピーチ・レベル・シフト、といった6機能に分類した。

以上の6機能において、講演で最も多く見られるスピーチ・レベル・シフトはA. 「引用を示すシフト」である(谷口, 2004: 121)ということがわかった。また、C. 「結論を示すシフト」はD. の「話し手の見解や感想を示すシフト」と重なる場合が多いのは、講演は最後に講演者の見解や主張を述べて結論とすることが多いためであると指摘している(谷口, 2004: 123)。さらに、4種の講演を分析した結果、男性のほうが女性よりシフトの比率が高いことがわかった。その理由は、男性は聴衆の前では丁寧さに欠けるという意識が多少働くが、男性より丁寧に話す傾向のある女性には、シフトはそれほど頻繁に使われていないことを示している(谷口, 2004: 128)。

以上の先行研究を通し、テレビ討論番組、学生討論、講演といった異なる公的場面において、スピーチレベル・シフトの機能は各々異なっていることが明らかである。また、各公的場面におけるスピーチレベル・シフトは特徴的なものが見られるため、日常会話のような定式化されているものが少ないと考えられる。

4. 量的分析

本節では、日本語ディベートにおけるシフトの回数、シフト発生頻度を図表で示すことを通し、日本語ディベートにおけるスピーチレベルの基調、立論・質疑応答・反駁におけるスピーチレベルの形態を明らかにする。

4. 1 シフトの回数

日本ディベート協会(JDA)主催の全日本ディベート選手権大会第1回から第19回の決勝戦、計24試合(ネット上で公開された文字化資料: <http://japan-debate-association.org/contest/history> 実録・JDAディベート大会)をデータとした上で、スピーチレベルの形態を明らかにするため、数量的な統計を行った。その結果、表1にJDAディベート大会の各試合における立論・質疑応答・反駁といった3部分の発話文数、シフトの回数とシ

表1 ディベートにおけるスピーチレベル・シフト発生の回数⁶

試合	立論	質疑応答	反駁	合計	シフトの比率
第1回	146 (5)	138 (7)	154 (7)	438 (19)	4.3%
第2回	162 (12)	174 (6)	161 (9)	497 (27)	5.4%
第3回	164 (13)	145 (0)	106 (4)	415 (17)	4.1%
第4回A部門	134 (15)	98 (0)	99 (10)	331 (25)	7.6%
第4回B部門	93 (0)	64 (1)	119 (3)	276 (4)	1.4%
第5回B部門	107 (4)	83 (0)	116 (7)	306 (11)	3.6%
第6回A部門	172 (5)	168 (1)	111 (18)	451 (24)	5.3%
第6回B部門	104 (2)	139 (0)	176 (8)	419 (10)	2.4%
第7回B部門	128 (0)	80 (0)	131 (6)	339 (6)	1.8%
第8回	194 (27)	238 (2)	167 (8)	599 (37)	6.2%
第9回	148 (9)	200 (0)	124 (2)	472 (11)	2.3%
第10回	141 (8)	208 (1)	122 (22)	471 (31)	6.6%
第11回	136 (16)	203 (3)	101 (9)	440 (28)	6.4%
第12回	166 (10)	216 (3)	147 (10)	529 (23)	4.3%
第13回	135 (2)	169 (3)	123 (3)	427 (8)	1.9%
第14回	157 (7)	183 (2)	186 (25)	526 (34)	6.5%
第15回	180 (16)	252 (6)	153 (20)	585 (42)	7.2%
第16回春季	226 (11)	233 (3)	200 (27)	659 (41)	6.2%
第16回秋季	181 (3)	210 (2)	164 (19)	555 (24)	4.3%
第17回春季	197 (7)	249 (11)	231 (38)	677 (56)	8.3%
第17回秋季	184 (4)	220 (4)	149 (21)	553 (29)	5.2%
第18回春季	151 (3)	182 (1)	137 (11)	470 (15)	3.2%
第18回秋季	179 (0)	174 (3)	176 (27)	529 (30)	5.7%
第19回	159 (5)	194 (7)	156 (9)	509 (21)	4.1%
合計	3,744 (184)	4,220 (66)	3,509 (323)	11,473 (573)	5.0%

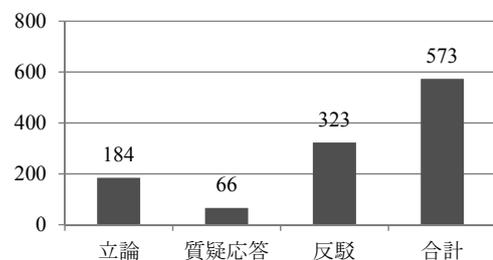
フトの比率を示す。

表1のシフトの比率(5.0%)から、日本語ディベートにおける談話の基本レベルは「デス・マス体」であるということが明らかになった。これにより、日本語ディベートは公的場面の談話であると言えよう。「デス・マス体」基調の談話において、「非デス・マス体」へシフトした比率が非常に低い。そのシフトの機能を究明することが本研究の目的である。

また、下の図1は合計573回のシフトにおける立論・質疑応答・反駁の占める回数を示している。

図1からわかるように、合計573回のシフトにおいて、反駁は半分を超えているということから、反駁は3部分の中で一番多くシフトした部分であるということが明らかになった。

図1 立論・質疑応答・反駁を占めるシフトの回数



以上の表1と図1を通して、日本語ディベートにおける基本レベル(スピーチレベルの基調)、シフト発生の頻度を明らかにした。

表2 すべての試合における「非デス・マス体」の細分化が出現した事例

試合	「ダ体」	「である体」	体言終了型	用言終了型	接続助詞 終了型	疑問詞の「か」 を付加した型	その他	合計
第1回		8		27				35
第2回	2			14		3		19
第3回		2		8				10
第4回A部門		2		17		1		20
第4回B部門				4				4
第5回B部門				9		2		11
第6回A部門				14	1	2		17
第6回B部門				8				8
第7回B部門				4				4
第8回	2	1		23	1	3		30
第9回		2		6		1		9
第10回	1	1	1	20	1			24
第11回			1	18		1		20
第12回		4		12		3		19
第13回				5	1			6
第14回				22		3	1	26
第15回	4	2	1	24	2	6		39
第16回春季	3	1		20	1	7		32
第16回秋季	3	1	2	6		3		15
第17回春季	5	3	1	26	1	6		42
第17回秋季				15	3	4		22
第18回春季	4			8	1	1		14
第18回秋季	1			16		3		20
第19回	4		3	9	1	4		21
合計	28	27	9	336	13	53	1	467

4. 2 「非デス・マス体」の下位分類が出現した回数

表2はJDAディベート大会におけるスピーチレベルの「非デス・マス体」の下位分類の事例を統計したものである。本研究では、JDAディベート大会に見られる「非デス・マス体」を表2のように、それぞれ「ダ体」、「である体」、体言終了型、用言終了型、接続助詞終了型、疑問詞の「か」を付加した型、「その他」といった7つに下位分類している。

表2に示すように、「非デス・マス体」の下位分類において、最も多く使用されているのが用言終了型(336回)であり、全体の3分の2を超えている。また、2番目に多く使われているのが疑問詞の「か」を付加した型(53回)であり、その次は「ダ体」、「である体」、接続助詞終

了型、体言終了型、「その他」の順となっていることがわかる。

表2を通して、24試合におけるスピーチレベルの形態を概観することができた。次の3節はそれぞれ立論・質疑応答・反駁の3部分において、どのようなスピーチレベルの形態と特徴を持っているのかについて具体的に分析していく。

4. 3 日本語ディベートにおけるスピーチレベルの形態

本節では、図表を通して、日本語ディベートの立論・質疑応答・反駁におけるスピーチレベルの形態を明らかにする上で、各部分の共通点と相違点を究明する。

4. 3. 1 立論におけるスピーチレベルの形態

図2 立論におけるスピーチレベルの形態

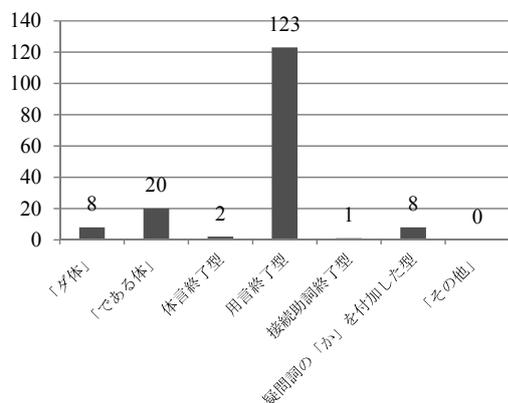


図2は24試合における「非デス・マス体」の下位分類の使用回数を表したものである。

図2より、「非デス・マス体」の中で一番多く使われたのが用言終了型(123回)であり、およそ全体の76%を占めている。2番目に多く使用されたのが「である体」(20回)であり、その次は「ダ体」(8回)、疑問詞の「か」を付加した型(8回)、体言終了型(2回)、接続助詞終了型(1回)、「その他」(0回)の順となっている。次はディベートにおける立論について紹介する。そして、スピーチレベルの形態は具体的にどのような特徴があるのかについて検討する。

立論の作り方については、肯定側と否定側が異なる。肯定側の立論のメリットは内因性・重要性・解決性の3要素からなり、否定側の立論のデメリットは発生過程・深刻性・固有性からなっている。2つの側は事前に資料を調べたり原稿を作ったりする。そして立論の際、特に第一立論の際、原稿をそのまま読むのが一般的である。しかしながら、決勝戦による緊張感や聴衆がたくさんいるため、ディベーターはおそらく無意識的にスピーチレベルを変えてしまう可能性がある。その変えた部分(いわゆるシフト)は無意識や緊張感といった主観的な理由を除くと、何らかの原因によって発生したのであろうか。これは次節5. 質的分析の部分で、詳細に分析する。

次は立論におけるスピーチレベルの形態についてである。本研究で用いられる用言終了型は、モダリティのない動詞・形容詞・形容詞型活用をする助動詞などの用言の終止形、およびその否定形・過去形・進行形である。例えば、第一立論の時、「プランを3点述べます。1. 原子力発電所を2001年から2010年にかけて段階的に徐々に廃止する。」と書かれている。原稿を作成する時は箇条書きで、「非デス・マス体」であるため、実際の

試合では、原稿をそのまま読んでいる可能性がある。また、プランの各項目の文法は特徴があり、「すべきである」という政策主張でも、「するだろう」という未来予測の主張でもない。プランに書かれた内容は実現する、実行される(すくなくともそういう法律の条文は法制化される)という仮定がある上で、真偽を問える命題ではない。したがって、用言終了型が多用しているのではない。さらに、用言終了型の表現として、「…ことができない」「…になってしまう」「変えられない」のような動詞の終止形・否定形が多く見られる。「である体」は「ダ体」よりやや多かった理由について、「である体」は文章を書く時に使われる文体である一方、「ダ体」は口語的な響きのある文体であるということが考えられる。

4. 3. 2 質疑応答におけるスピーチレベルの形態

図3は24試合の質疑応答におけるスピーチレベルの形態を示したものである。

図3 質疑応答におけるスピーチレベルの形態

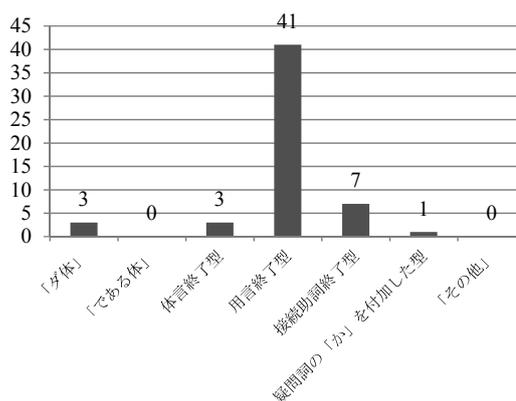


図3より、質疑応答において、一番多く使用されたのが用言終了型(41回)であり、およそ全体の74.5%に達している。また、2番目に多く使われたのが接続助詞終了型(7回)であり、その次は「ダ体」(3回)、体言終了型(3回)、疑問詞の「か」を付加した型(1回)、「である体」(0回)、「その他」(0回)の順となっている。

立論部分(図2)と比較すると、相違点が大きく3つ挙げられる。1つは、「である体」の使用回数についてである。図2の立論においては「である体」が20回使われた一方、図3の質疑応答においては「である体」の使用回数が0である。もう1つは、接続助詞終了型についてである。立論においては接続助詞終了型の使用回数は1回であった。それに対し、質疑応答においては7回にのぼる。最後の1つは疑問詞の「か」を付加した型についてである。立論においては疑問詞の「か」を付加した

型が8回も使用されたのに対し、質疑応答においてはわずか1回にすぎない。この点については、日常会話における「質問-応答」という連鎖の仕方と異なり、「非デス・マス体」では疑問詞「か」の使用が少ないと言えるのであろうか。

4. 3. 3 反駁におけるスピーチレベルの形態

図4は24試合の反駁におけるスピーチレベルの形態を示したものである。

図4 反駁におけるスピーチレベルの形態

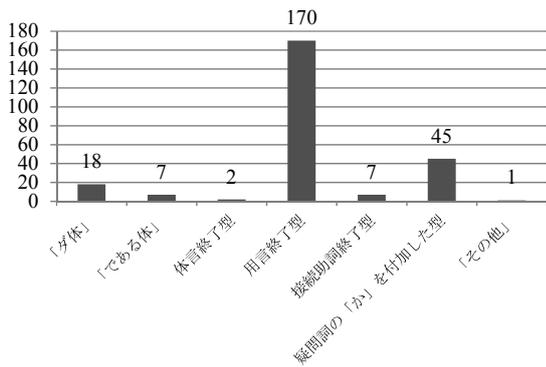


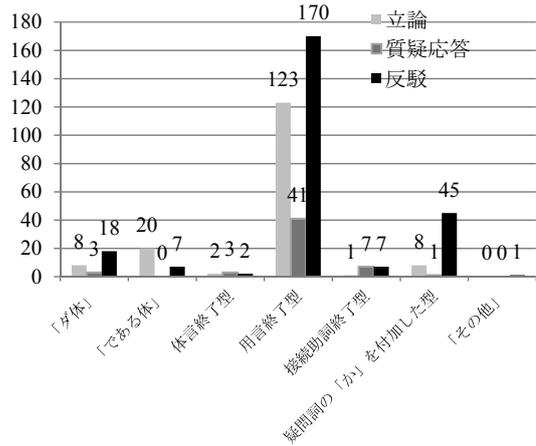
図4より、反駁において、一番多く使用されたのが用言終了型(170回)であり、全体の68%に達している。また、2番目に多く使われたのが疑問詞の「か」を付加した型(45回)であり、その次は「ダ体」(18回)、「である体」(7回)、接続助詞終了型(7回)、体言終了型(2回)、「その他」(1回)の順となっている。

反駁において、注意すべき点は疑問詞の「か」を付加した型⁷である。使用回数は45回であり、およそ全体の5分の1を占めているということから、立論と質疑応答より、大幅に使われている。この疑問詞の「か」の機能については更なる検討する必要があると考えられる。

4. 3. 4 立論・質疑応答・反駁におけるスピーチレベルの形態の比較

図5はJDAディベート大会の立論・質疑応答・反駁におけるスピーチレベルの形態の比較を示したものである。

図5 立論・質疑応答・反駁におけるスピーチレベルの比較



まず、立論・質疑応答・反駁におけるスピーチレベル形態の共通点については、図5より、3部分共に用言終了型の使用頻度が一番高い。また、7種の「非デス・マス体」について、3部分の体言終了型と「その他」における使用数はほぼ差が見られない一方、疑問詞の「か」を付加した型における使用数は差が極めて大きいことがわかった。それ以外に、「ダ体」、「である体」、接続助詞終了型もある程度の差が見られた。使用数の差から3部分におけるスピーチレベルの特徴がみえると考えられる。

次は立論・質疑応答・反駁におけるスピーチレベル形態の相違点について分析する(共通点の用言終了型を除く)。

立論におけるスピーチレベル形態の特徴は、1)「である体」の使用回数が多い、2)「ダ体」と疑問詞の「か」を付加した型の使用回数がやや多い、3)体言終了型と接続助詞終了型がほぼない、4)「その他」が全くない、という4点が含まれる。「である体」は立論において、特に客観的な事実を述べる際に多く使用されるということがわかる。

質疑応答におけるスピーチレベル形態の特徴には、1)接続助詞終了型の使用回数が多い、2)「ダ体」と体言終了型の使用回数がやや多い、3)疑問詞の「か」を付加した型とがほぼない、4)「その他」が全くない、という4点が含まれる。最も注意すべき点は接続助詞終了型の使用である。接続助詞は日常会話においても多用されており、ディベートの質疑応答においても多用されているということから、一対一の会話であるため、相手側の反応と緊密に関係しているからではないかと思われる。

反駁におけるスピーチレベル形態の特徴には、1)疑問詞の「か」を付加した型の使用回数が多い、2)「ダ体」の使用回数が少し多い、3)「である体」と接続助詞終了型がやや多い、4)体言終了型と「その他」がほぼない、という4点が含まれる。最も注意すべき点は疑問詞の

「か」を付加した型の多用である。疑問詞の「か」を付加した型を使用することにより、相手側の問題点を取り出し反駁することが可能であると考えられる。

5. 質的分析

本節は立論・質疑応答・反駁といった3部分において、詳しい事例を挙げながらシフトの機能を説明していく。

5. 1 立論におけるシフトの機能

① 論点を示す

例1)

次の大きな論点に移ります。

問題2：犯罪抑止のために、有害無益である。

問題の第二は、死刑が、刑罰として、有害無益であるということです。要するに目的合理性がないということです。これには更に2つのサブの論点が存在します。

問題2の1：死刑には犯罪抑止力はない。

これまで、死刑の犯罪抑止力を統計的に証明しようとする試みが多くなされてきていますが、いずれも証明するにいたっていません。

(第3回JDA日本語ディベート大会決勝戦肯定側第一立論)

「次の大きな論点に移ります。」は、ロードマップであり、聞き手に対するポライトネスが働いているため、「デス・マス体」を使用している。下線部は論点とサブの論点を示すサインポスティングの部分である。この部分は簡潔性が重視されるため、モダリティがなく、命題内容の部分だけになっている。このように、命題内容の部分と、モダリティを持った部分との交代により、シフトが起こったわけである。

② 反論を示す

例2)

次なんですけども、4のカード…4番目のカードを見て欲しいんですけども「80%5年生存率」とあるんですけども、このカードで述べていることを見てください。「肝臓移植をした人が5年間生きた」、それだけの話じゃないですか。じゃ、その人たちはしなかったらどうなるんだろう。仮に、一人…、しなかったら1年しか生きられなかった人が5年生きられた、それはすごく価値のあることなんですけど、「受けた人がただ5年生きた」というんだったら、もとがわからないだけに、それがどれだけいいことなのか、判断することは不明です。

(第2回JDA日本語ディベート大会決勝戦 否定側第

一立論)

「それだけの話じゃないですか。」「じゃ」「…不明」という疑問視の表現からみると、相手側の立論に対して反対の意見を出すということがわかった。疑問文の形式を通じて反対意見を提出するのは特徴的なことである。

③ メタ言語による繰り返し

例3)

次に、肯定側のプランによってアドバンテージが得られるかどうかについて議論します。

まずD-1) 早期の逮捕により、組織犯罪の防止をする。これは、彼らの証拠は、一切それについては証明しておりません。(中略)

また、2つ目として、先ほど言ったように、本人が黙っていれば、本命の犯罪について一切証言しなくていいわけですから、アドバンテージは得られない。

D-2) 社会正義ですが、これは、別件逮捕を合法化しても、社会正義は変わらない。なぜならば黙っていても、何も出て来ずに、変わらないからです。で、かえって、私たちは、別件逮捕を許すことによって社会の不正義が低くなる…不正義が増える、と、後で、不利益で言います。

(第4回JDA日本語ディベート大会A部門決勝戦 否定側第二立論)

「先ほど言ったように」というメタ言語の表現により、内容を再び繰り返す、ということがわかる。

例4)

次に、このプランを採用することによって、2つの利益が生じます。

利益1、冤罪・誤審の防止です。

論点1は、現状、冤罪・誤審は多数発生しています。…(引用文省略)

論点の2として、原因がですね、現在の司法システムにある、ということです。…(引用文省略)

論点3として、弊害の重大性。

冤罪・誤判は本来あってはならないことです。これは、人権保護の皆たる司法が自ら重大な人権侵害を行うことになるからです。

論点4として、利益1の発生過程です。…(引用文省略)

この様に、陪審制の裁判によって、陪審員という、中立な立場の人に判断させることによって、今までの構造を変える。そして、検察側の強引な捜査をなくす。これが、[冤罪・誤判の]減少につながるという訳です。

(第5回JDA日本語ディベート大会B部門決勝戦 肯定側立論)

「この様に」「これが、…という訳です」というメタ言語的表現からみると、以上4つの論点をまとめることが観察できる。例1)と同じように、論点を示すサインポストイングの部分は簡潔性が重視されるため、モダリティがなく、命題部分だけになっている。命題内容だけの部分(論点の提示)と、モダリティを持った部分(最後の論点のまとめ部分)との交代により、シフトが起こったわけである。

④ 引用のまとめ

例5)

2003年、社団法人日本プロジェクト産業協議会。

「カジノは、その生み出す“財”と“サービス”がすべてキャッシュとなる。これは非常に特殊な業界であり、ほかにこのような業界は存在しない。通常のビジネスでは、モノの売り買いには伝票があり記録が残る。しかしここではトランスアクション(取引・売買)が記録できないため、最終日に店を閉めて、はじめて儲かったかがわかるという仕組みになっている。」終わり。

つまり、閉めるまで、儲かるかどうかというのが、実際に記録が残らないと、わからない。だから、不正が行われているかどうかという記録がないので、そういうのは判断ができないので…判断できません。

(第14回JDA春期ディベート大会決勝戦 否定側第二立論)

「つまり」という談話標識を通して、上の要因を総括してまとめていることがわかる。

5. 2 質疑応答におけるシフトの機能

① 再確認を求める

例1)

岡安：証拠資料を貸してください。

土橋：はい。

岡安：人々が…まず第1点なんですけれども、人々が犯罪を犯さないのは刑罰で抑止しているからというスタンスですか？

土橋：はい、そうです。

岡安：抑止効果がなくなると犯罪が増える。

土橋：そうです。

岡安：わかりました。それで、論点の3つ目なんですけれども、まず、緊張して論理的に考えられなくなるといような話をしていましたが、そういう…そういう人

たちは、でっち上げの自白を見破ることができない、ということなんですか？

土橋：そういうことです。

(第1回JDA日本語ディベート大会決勝戦 肯定側による反対尋問 岡安→土橋)

例1)は対話者の発話を挟んでのシフトである。まず、「人々が…まず第1点なんですけれども、人々が犯罪を犯さないのは刑罰で抑止しているからというスタンスですか？」という質問をした。その後、「抑止効果がなくなると犯罪が増える。」という陳述式の発話をして、応答側に再確認を行った。「そうです。」という聞き手の反応から話し手自身の要求を満たし「わかりました」と言い返したわけである。

② 話題転換

例2)

岡安：わかりました。それでですね、次の証拠資料なんですけれども、意識が高い理由として、裁判官は試験を通して切磋琢磨しているし、具体的証拠を見る力があるということは、能力について述べていらっしゃるということですか？

土橋：はい。

岡安：次なんですけど、他の制度を改革しなければならない。これはどうしてでしょうか？

土橋：これはおそらく、他の、取調の際にテープを回していない、あるいは証拠開示制度を設けていない、などということが…ことにより…、

岡安：行われないと、陪審制を導入しても、そういう冤罪は減らない、そういうことですか？

土橋：はい。

岡安：わかりました。それで、次なんですけれども、マスコミの過剰報道についてなんですけれども、日本のように過度のマスコミを云々、とありますが、これはわれわれの計画採択後も続く、というようなスタンスに立っていらっしゃるんですか？

土橋：はい。おそらく続くものと思われます。

(第1回JDA日本語ディベート大会決勝戦 肯定側による反対尋問 岡安→土橋)

例2)は一人の発言順が続いている中でのシフトである。「次なんですけど」という標識からみれば、新しい話題に入ったということがわかる。8行目の「次なんですけれども」からも、さらに新話題に変わったことが明らかである。これは発話者が意識的にあるいは無意識的に行っているかは判断しにくく、あくまでもシフトと話

題の転換などとの共起関係があるということである。しかも、一対一の関係ではない場合が多いと言える。

③ メタ言語による繰り返し

例3)

土橋：それでなぜラベルをはられるんですかね。

大矢：だからそれがわれわれの、論点1で述べているように、不当な取調や裁判官による偏見によって、本来は無罪である人が有罪となる。そのために…そのため、まわりから不当に敵意を…

土橋：ちょっとすいません、時間ないんで、論点3に行かしてください。2番目の感情の話で、緊張してると論理的に考えられない。今僕もちょっと緊張しててあまり論理的に考えられないんですけども、(笑)…緊張するということはあなたは理由にならないと言っていましたけれども、この論理的に考えるというか、緊張すると論理的に考えられないという部分は認めてくださったと思ってよろしいでしょうか。

大矢：いや、これは論理的に考えられないということではなくて、論理的に考えるのが得意でない人もいる、という話だと私は思います。

(第1回JDA日本語ディベート大会決勝戦 否定側による反対尋問 土橋→大矢)

例3)は対話者の発話を挟んでのシフトである。「論点1で述べているように」というメタ言語の標識より、立論で述べていることを再び繰り返したことがわかる。論点の提示については、立論の部分もよく「非デス・マス体」が出られており、上の質疑では直接に立論のスピーチを重複している。

④ 反論を示す

例4)

Q：ありがとうございます。では、デメリットの方に戻って、インパクトの2番で、低所得者が対象である、と。否定側がおっしゃりたいことというのは、こういう人たちからお金を吸い取って、依存症を放置してしまうから良くない…

A：というかですね、そういう、もともとお金がない人からお金を取って、依存症にする、と…まあ治療するとか、いろいろ言われるかも知れませんが、少なくともそういう状態になってしまうわけですよ。で、儲かる人だけは儲かる…要するにカジノを営んでいる人は、儲かってウハウハなわけですよ。でも、そういう形…そういう構造で本当にいいんだろうか。そこまで、経済問題を…求めてまで、カジノ合法化というのをやる意

味があるんだろうか、というのが、私たちの考え方なんです。

(第14回JDA春期ディベート大会決勝戦 肯定側質疑 奈良→田中)

例4)は一人の発言順が続いている中でのシフトである。応答側は「でも、そういう形…そういう構造で本当にいいんだろうか。」という質問形式によって、最後に自分側の主張を言い出したことになった。これは立論における②「反論を示す」と同様である。ただし、出現頻度が異なるという面から次の節で再度論述する。

5.3 反駁におけるシフトの機能

① 主張を示す

例1)

解決性だけやります。よろしいでしょうか。

解決性について。まず、われわれのスタンスとしては、陪審員というのはマスコミに影響されている、という点で、被告人有罪の推定が働くので、裁判官と全く同じである、という点です。

しかしながら裁判官の方が、慣れている分、あるいはプロとしての責任感があるため、冷静・論理的かつ客観的に判断できるので、裁判官のほうが良い。

それでは個々の議論を見ていきます。

(第1回JDA日本語ディベート大会決勝戦 否定側第一反駁)

否定側はまず「陪審員はマスコミに影響されているという点は、被告人有罪の推定が働くので、裁判官と全く同じである、という点です」というスタンスを出した。そして、「しかしながら」という逆接によって、陪審員よりさらに裁判官のほうが良いという主張を出している。

② 話題転換

例2)

で、こういう目でコンテンション1を見てみてください。コンテンション1なんですけど、まず、現状において、裁判官というのは、検察とつるんでいて、有罪を作り上げている。こういう構図っていう、癒着しているこの構図は完全に認められておりますので、ここはグラントされています。ここはだから…覚えておいてください。

(第1回JDA日本語ディベート大会決勝戦 肯定側第一反駁)

「で、こういう目でコンテンション1を見てみてください。」という発話から、新たな話題に入ったことがわかり、コンテンション1という新しい話題をめぐる、解釈し始めるということがみられる。

③ 反論を示す

例3)

で、次、なんですけれども、たぶんこの部分を肯定側は最後に伸ばしてくると思うんですけども、ここも吟味しましょう。

「100%生きる…」この後こう続けるんですね、「移植しなければ必ず命を失う患者さんを対象としている。100%生きられるはずであった患者さんの20%から30%を移植で失うのではなく、数カ月以内に生命を失うことが予測されていた患者さんの70から80%を助けることができる…」と。確かに助けることはできるでしょう。「だけど、実際にアメリカでそのようなことが行われているか。要するに、やれば助けることはできます。それは我々も認めています。実際に、そういった本当に数カ月以内に命を失うことが予測されていた患者さんに対して移植が行われるのかどうか、そこが…私が問題にしたのはそこなんです。」

(第2回JDA日本語ディベート大会決勝戦 否定側第一反駁)

立論・質疑応答にみられる「反論を示す」要因と同様であり、質問形式で相手側に対する反論を述べている。

④ 議論のまとめ

例4)

これは、日本での唯一のアナリシス…分析、このラウンドでの唯一の分析となります。これは、我々の根拠です。で、これは、私が第二立論のところで読みましたとおり、免疫抑制剤を使った患者は、70%が死ぬ、と。その…主作用の、肺炎なり、悪腫瘍なり何なりの、感染症で、70%が死ぬ、ということ、を、証明し、これは、完全に認められました。

「ですから、まとめますと、まず1点目として、否定側は、手術の効果を証明していない、ですから、利益が出るとは言えない。」そして2つ目は、手術をすることによって、かえって手術の必要がなかった人、手術をしなくても5年生きられたはずの人に、手術を無理矢理施して、それによって、術後必要な免疫抑制剤というものを加え、かえって免疫抑制剤の主作用の感染症で、死んでしまう、と。ここが彼らのプランを採用することによる弊害となるわけです。

以上の2点から、肯定側の政策を採るべきではないと主張します。

(第2回JDA日本語ディベート大会決勝戦 否定側第二反駁)

「まとめますと」というはっきりした標識があるので、第二反駁の最後のところで、議論されたことをまとめて、もう一度主張を明確化にする。

⑤ 立論の繰り返し

例5)

その次に、もし原発の重大事故が起こればチェルノブイリの例で50兆円というようなことを言っておりましたが、まずそのようなクラスの原発事故は日本では起こりませんし、これまでも起こっておりません。これから起こらないというのは私のパートナーが第二立論で証明しました通りです。「規制強化によってフェールセーフシステム、その他安全機能が働くので絶対に起こりえない。まあ、ほぼ確実に起こりえないということで証明されております。」

(第6回JDA春季ディベート大会A部門決勝戦 否定側第一反駁)

「…第二立論で証明しました通りです」という表現から、前の立論で述べていることを反駁で再び繰り返していることが明らかである。立論の部分のみ「非デス・マス体」が使用されたのはその部分を強調しようとすると考えられる。

6. 考察

本研究では、日本語母語話者を調査対象者として、それぞれ日本語ディベートの立論・質疑応答・反駁におけるスピーチレベルの実態を分析・考察を行った。その結果、日本語ディベートにおける談話の基本レベルは「デス・マス体」であるということが明らかになった(表1のシフトの比率(5.0%)より)。すなわち、日本語ディベートは公的場面における談話に属すると言える。同じパブリックスピーキングである谷口(2004)の日本語の講演におけるシフトの比率(14.9%、39.4%、24.1%、42.2%)をみると、日本語ディベートよりシフトが多く観察される。つまり、日本語ディベートは日本語の講演より「デス・マス体」を多用していると言えよう。

そして、図1から反駁におけるシフトは323回であり、ディベート全体の半分を超えているということから、反駁は3部分の中で最も多くシフトした部分である

ということが明らかになった。反駁は第一立論のように事前に原稿が準備されているわけではなく、質疑応答のような一対一の会話のため、質疑側と応答側の相互作用を考慮するスピーチでもない。反駁スピーチの主な目的は相手の議論に反論し、かつまた自分たちの議論を建て直すことであり、特に最後の反駁スピーチでは、なぜ自分たちのチームのほうがよりよい議論を展開したかを強くアピールする。すなわち、反駁は立論・質疑応答と異なる性格を持つため、日本語ディベートでシフトの一番多い部分になると思われる。

立論におけるシフトの機能では、③「メタ言語による繰り返し」は谷口(2004)で挙げた「B. 繰り返しによる強調のスピーチ・レベル・シフト」(p. 122-123)と類似している。このことから、日本語ディベートは日本語の講演と類似したところがあると言えるのではないか。また、谷口(2004)は、講演で最も多く見られるスピーチ・レベル・シフトは引用を示すシフトである(p. 121)と指摘している。だが、本研究ではディベートにみられる引用部分は「非デス・マス体」であるため、引用文を分析対象外とした。ただし、引用部分の前後を分析した結果、谷口(2004)の「A. 引用を示すスピーチ・レベル・シフト」(p. 121)とは異なる機能の④「引用のまとめ」が観察された。

また、質疑応答におけるシフトの機能として、①再確認を求め、②話題転換、③メタ言語による繰り返し、④反論を示すの4点が挙げられる。質疑応答において、一人の発言順が続いている中のシフトと、対話者の発話を挟んでのシフトがある。一人の発言順が続いている中のシフトである場合、②「話題転換」、④「反論を示す」といった機能が働いている。一方、対話者の発話が挟んでのシフトである場合、①「再確認を求め」、③「メタ言語による繰り返し」、といった機能が働いている、ということが観察される。

宇佐美(1995)は敬語使用から不使用へのシフト(+・0→-)の条件として、「何かを確認したり、確認のための質問をする、或いは、それに答える時」(p. 34)を提示している。しかし、①「再確認を求め」は一回目の質問-答えという連鎖が終わった後、応答側に向かいもう一度答えを確認する時に、「非デス・マス体」から「デス・マス体」に変わるというシフトが行われた。確認という点では宇佐美(1995)と同様であるが、シフトの仕方という点では異なる。このことから、日本語ディベートと初対面会話との異なる性格は、シフトに影響を及ぼすのではないかと考えられる。そして、宇佐美(1995)によると、「新しい話題を導入する時」(p. 36)という条件の下で、敬語不使用から使用へのシフト(-→+・0)が行

われたと結論付けている。

②「話題転換」は「非デス・マス体」から「デス・マス体」に変わるという点から、宇佐美(1995)の「新しい話題を導入する時」(p. 36)と同様のことであると思われる。そして、③「メタ言語による繰り返し」は立論と同じように、谷口(2004)で挙げた「B. 繰り返しによる強調のスピーチ・レベル・シフト」(p. 122-123)と類似している。

さらに、反駁におけるシフトの機能として、①主張を示す、②話題転換、③反論を示す、④議論のまとめ、⑤立論の繰り返しの5点が挙げられる。その中で、②「話題転換」は質疑応答と同じように、「非デス・マス体」から「デス・マス体」に変わるという点から、宇佐美(1995)の「新しい話題を導入する時」(p. 36)と同様のことである。そして、⑤「立論の繰り返し」は谷口(2004)で挙げた「B. 繰り返しによる強調のスピーチ・レベル・シフト」(p. 122-123)という機能と類似している。

先行研究で言及されなかった機能として、本研究では「論点を示す」、「反論を示す」、「主張を示す」、「論点のまとめ」、「議論のまとめ」が観察される。これらは日本語ディベートにおけるスピーチレベル・シフトの機能の特徴付けられる点であると言えよう。

7. おわりに

本研究の不足点、本研究で明らかにならなかったこと、今後明らかにする必要があることを、今後の課題として以下に述べる。

まず、本研究の調査対象について、今回の調査はJDAディベート大会であり、対象は大学生と一部の社会人に限定された。対象の年齢、職業などをバラエティにすることにより、調査の結果が変わるのではないかと考える。全国中学・高校ディベート選手権大会(通称:ディベート甲子園)とJDA全日本ディベート選手権大会におけるスピーチレベルの比較分析は今後の課題となる。

また、詳細な分析に関しては、終助詞の有無についての更なる検討が必要である。終助詞と発話のスピーチレベルとの関係はいまだに不明であり、さらに談話の種類(会話、メール・ブログ、手紙等)による影響の有無もよく分かっていないので、今後更なる調査が必要である。ディベートの質疑応答における「あいづち」は今後どのように位置づけられるのかも課題となる。

さらに、本研究は主に立論・質疑応答・反駁の3部分を分けてそれぞれ分析したうえで、比較を行った。しかし、対話部分(質疑応答)と独話部分(立論・反駁)でのシフトは性格が異なり、同じ組上で議論するのは難しい

という問題点が指摘され、今後さらなる研究が必要であると考えられる。

最後に、日本語教育における課題である。日本語学習者(特にスピーチレベルの変化がない言語を母語とする学習者)にとって、日本語のスピーチレベル操作についての理解は難しく、上級・超上級話者であってもその運用能力に不安を感じている学習者は少なくないようである。したがって、今後の課題として、ディベートにおける日本語母語話者と日本語学習者の比較分析も必要である。

注

¹ 「デス・マス体」という用語の表記方法はカタカナ、ひらがな、中黒の有無など文献によって異なる。本研究では「デス・マス体」と表記し、先行研究に言及(引用)する際は元の文献の表記に従う。

² 「スピーチレベル・シフト」の表記方法(中黒の有無)は文献によって異なる。本研究では「スピーチレベル・シフト」と表記し、先行研究に言及(引用)する際は元の文献の表記に従う。

³ 『「守られていて当たり前で、その期待される言語行動がないときに、初めてそれが意識され、ポライトではないと捉えられる」という類ものである。特別に丁寧でも失礼でもない発話、及び談話である。この特定の状況ごとに暗黙のうちにある「守られていて当たり前」のことを満たしている、失礼のない発話、及び、その集合体としての談話の状態を『無標ポライトネス』と捉える』(宇佐美, 2001b: 2-3)。

⁴ 「例えば、Brown & Levinson (1987)は、相手のフェイスを脅かす行為、フェイス侵害行為(FTA: Face Threatening Acts)をせざるを得ないときに、『相手のフェイス侵害[FT (Face Threat) 度]を軽減するためにとる言語ストラテジー』をポライトネスとして捉えているが、筆者は、これを『有標行動』と捉え、その効果としてのポライトネスを『有標ポライトネス』と捉える』(宇佐美, 2001b: 2)。

⁵ 大塚(2004: 124)によると、石原伸晃、池田幹幸、枝野幸男は「日曜討論」の出席者である。石原伸晃: 自民党衆議院議員(昭和32年生まれ) 池田幹幸: 日本共産党参議院議員(昭和16年生まれ) 枝野幸男: 民主党衆議院議員(昭和39年生まれ)

⁶ 第1回~第15回、第19回はすべて春季大会であり、第16回~第18回は秋季大会も公開されている。なお、()の外は発話文数で、()の中はシフトの回数である。第何回というのは春季大会、秋季大会それぞれの初回からの通算回数である。春季大会は1995年が第1

回大会、秋季は1998年が第1回(<http://japan-debate-association.org/contest/history>) また、立論、質疑、反駁ではスピーチの時間が違う。

⁷ 疑問詞の「か」を付加した型の例をみると、「のか」と「か」の2つの形式がある。

例(1)は疑問の「か」の前に助詞「の」を付く形で、問い質したり、自分に言い聞かせたりする意を表す。例(2)は「か」の前に何も付かない形である。

例(1)「何か、良い議論、良い議論っていうと聞こえはいいですけど、結局じゃあ、そんな誰かが傷ついているかもしれないのに、本当に良い議論をしている、っていうふうに言えるのか。」(第18回JDA秋季ディベート大会決勝戦 肯定側第二反駁)

例(2)「で、じゃあ、我々の一院制を導入したらどうなるか。」(第19回JDA春季ディベート大会決勝戦 肯定側第二反駁)

参考文献

- Ikuta, Shoko. (1983). Speech Level Shift and Conversational Strategy in Japanese Discourse, *Language Sciences*, 5 (1), 37-53
- 石崎晶子(2000)「電話連絡の会話におけるスピーチレベルシフト」『言語文化と日本語教育』19 62-74
- 宇佐美まゆみ(1995)「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662 27-42 昭和女子大学近代文学研究所
- 宇佐美まゆみ(2001)「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—」『談話のポライトネス』(第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告書) 9-58 国立国語研究所
- 大塚容子(2004)「テレビ討論番組における文体切り替えの効果—「ポライトネス」の観点から—」『崎阜聖徳学園大学紀要』43 111-124
- 杉山ますよ(2000)「学生の討論におけるスピーチレベルシフト—丁寧体と普通体の現れ方—」『大東文化大学別科論集』2 81-102
- 谷口まや(2004)「日本語の講演の談話におけるスピーチ・レベル・シフトの形態と機能」『早稲田大学日本語教育研究』4 117-129
- 三牧陽子(2002)「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に—」『社会言語科学』5/1 56-74

The Form and Function of Speech Level in Japanese Debate

HEJING FENG

This study aims to reveal the morphology and function of speech level shift, as well as the function of speech level shift maintenance in Japanese debate. Speech level in Japanese debate is generally classified into “desu-masu” form and “non-desu-masu” form. This paper seeks to clarify the function of “desu-masu” form shifting to “non-desu-masu” form, as well as “non-desu-masu” form shifting to “desu-masu” form. This study will shed light on forms of speech level shift maintenance that have not been discussed in previous studies. We have used the Japan Debate Association (JDA) official website to gather literal data from 24 JDA-organized competitions, which are staged for native Japanese speakers.

The results show that the function of speech level shifts in three parts; from the constructive speech, to the cross examination, and final rebuttal. During the constructive speech, there were four functions: 1. Showing contention; 2. Refutation; 3. Repeating meta language; and 4. Presenting a summary. There were also four functions in the cross examination: 1. Second confirmation; 2. Topic switching; 3. Repeating meta language; and 4. Refutation. In the rebuttal speech, there were five functions: 1. Showing calm; 2. Topic switching; 3. Refutation; 4. Presenting a summary; and 5. Repeating the constructive speech.

These results could be a valuable resource for those involved in Japanese education, particularly when helping advanced Japanese learners develop their public speaking skills.